

「教育詩学」はどめまゐた

私たちの研究は、理論と実践をそれぞれの語りのテキストという共通の視点から取り上げたいことを試みることであり、これまで教育が手がけなかった教育研究の新たな領域を開拓しようと目指したわけです。それはまた、整算手研究と学校現場の双方に直接的なフィードバックを為していくだけでなく、同時に教育の言説におけるレトリック論をさらに開発していくことを課題としています。ですから、教育詩学の試みは、二つの方向からの研究関心をレトリック論による言説分析という共通の関心の紐にのせるところにあって、テキストとして見立てられた教育全体を視野におさめていくことをねらっているといえます。つまり、第二に、日本の学校教育における様々の問題現象（教育意がどのように向き合ひ、その「問題現象」によって表出されている「現代教育の病理的意味をどのような文脈で理解するかという臨急整算からの方向と、第二に、整算言説分析と創造性し創出という整算研究の現出展開のための先進的分野として、整算活動を「語り」の様な「見立ての方法」「筋立ての仕方などといったことは世界に移行させることにより、整算の意味を発現させを養うことにより言説の仕組に關する研究からの方向です。

一・科研費：萌芽的研究のテーマ

「レトリック論による教育言説の創出に關する萌芽的研究

——教育詩学（ポイエティック）探求——

臨床教育学と教育思想史研究との出会い
教育言説・教育学研究の語りをめぐる状況認識

一・「語りの技法」と「教育詩学」

「詩学」のイメージ・例えば、「たとえ」の話

「ある」と「ない」のはどこまで ニュー・レトリック論を越えて

一・「語りの技法」とそのテキスト

「詩学」と「近代問題」

三木清と京都学派 教育言説の「たとえ」としての小原國芳

一・「教育詩学」——虚と実のはどこまで——

世話人 皇 紀夫 発表者 鈴木晶子 弘田陽介

「雨と聞く」それとも「雨を聞く」

正徹物語より

為秀の、

哀れ知る友こそかたき世なりけれ

ひとり雨聞く秋の夜すがら

の歌を聞きて、了俊は、為秀の弟子になられたるなり

杜子美が詩に、「聞^{キテ}雨^ヲ寒更^キ尽^キ、聞^{ケバ}門^ヲ落葉^{深シ}」といふ詩のあるを、我らが法眷の老僧のありしが、点じ直したるなり。

昔から「雨と聞く」と点じたるを見て、「この点悪し。」とて、「雨を聞く」とただ一字はじめて直したり。一字の違いにて、天地別なり。「雨と」と読みては、初めから落葉と知りたるにて、その心狭し。「雨を」と読みつれば、夜はただまことの雨と聞きつれば、五更すでに尽きて朝に門を開きてみれば、雨にはあらず、落葉深く砌に散りたり。この時はじめておどろきたるこそおもしろけれ。されば歌もただ文字一つにてあらぬものにきこゆるなり。

正徹は備中の国の人。室町時代前期、京都の東福寺の書記となつたので「徹書記」とも呼ばれた。歌を冷泉為尹、今川了俊に学び、平淡な二条家の歌風を排して、定家風の余情妖艶を理想とし、独自の象徴的・浪漫的な歌風を樹立した。著書には『正徹物語』のほか、歌集『草根集』がある。

